

北大 B 球場界隈の自然と植物

姉帯 正樹

※部の歩み—創立 70 周年記念誌—

北海道大学準硬式野球部別冊より再掲

今回、著者の姉帯正樹先生(現薬学部創薬センター客員教授)と北海道大学準硬式野球部 OB 会のご好意で「部の歩み—創立 70 周年記念誌—」に掲載された、北大 B 球場界隈の自然と植物について書かれた記事を再掲することになりました。ぜひお楽しみください。

松田 彰 (15 期 同窓会長)



北大B球場界限の自然と植物

姉 帯 正 樹

部の歩み

—創立70周年記念誌—

北海道大学準硬式野球部

別刷 65—76頁

令和6年(2024)1月

北大B球場界隈の自然と植物

姉 帯 正 樹 (昭和47年理卒)

はじめに

獣医学部の北には広大な農場が広がり、南には原始の面影を今に伝える林と古代人が生活した痕跡の見られる場所がある。筆者が入学した昭和43年(1968)、農場にはサイロや牛がのんびりと草を食む牧歌的雰囲気があり、「牛が飛び出す 注意」なる看板も見られた。林の中には二代目恵迪寮の古色蒼然たる木造姿があった。それから半世紀以上が経過し、その一帯の景観は一変した。

現在、その一帯は北キャンパスと称され、平成10年(1998)の先端科学技術共同研究センターを皮切りに、次々と産学官の先端的な研究施設が立ち並び、現在も建設ラッシュは続いている。平成13年(2001)7月には環状通エルムトンネルが開通、馬術部厩舎跡地には創基125周年記念施設「遠友学舎」が建てられた。最近は北海道マラソンの最終盤コースの一部になっている。令和3年(2021)8月、オリンピック東京大会のマラソンランナーが多数の附置研究所の間を走り抜け、その映像は全世界に配信された。

昭和57年(1982)には老朽化した恵迪寮が現在地に移り、その跡地に現在のB球場が造成され、昭和60年(1985)8月に球場開き記念試合が挙行された。B球場造成に伴い一塁側の原始林の自然は一部損なわれたが、かろうじて昔の面影を残している。昭和57年7月から平成26年(2014)3月まで、獣医学部に隣接する北海道立衛生研究所に勤務(平成22年4月からは再任用)し、薬草、毒草、山菜、アイヌ民族有用植物を研究対象としてきた筆

者は、この北キャンパスを自分の庭のように歩き回り、その景観の変貌ぶりをつぶさに観察してきた。

明治45年(1912)度の寮歌『都ぞ弥生』4番には「雲行く雲雀に延齡草の／真白の花影さゆらぎて立つ／・・・／小河の滯をさまよひゆけば／うつくしからずや咲く水芭蕉」という一節がある。部員たちがボール探しに踏み込む原始林一帯には、寮歌に詠まれたオオバナノエンレイソウ、ミズバショウはもとより、オクトリカブト、ニリンソウ、アズマイチゲ、バイケイソウ、ヒメザゼンソウ、キバナノアマナ、オオウバユリ、エゾエンゴサクなどが生き残っており、当時の情景を垣間見ることが出来る。一方で、哲学者ソクラテスの命を奪ったドクニンジンなどの帰化植物が勢力を拡大している。

平成13年から20年(2008)まで、薬理学実習の非常勤講師として獣医学部学生を原始林、遺跡保存庭園などを経て、道衛研薬用植物園に案内する機会を得た。学生たちはキャンパスの古の情景に思いを馳せ、通学路の傍らに自生する植物の多くが薬草、山菜または毒草であることを学んで目を輝かせていた。今回は、当部OB、OG及び現役の皆さんを誌上でご案内したい。

原始林の春を彩る可憐な妖精たち

原始林の花暦は4月上旬、色とりどりのクロッカス(アヤメ科)に始まる(写真1)。昭和6年(1931)から58年(1983)春までの半世紀に亘ってこの地にあった恵迪寮の住人

が植えたものであろう。原産地はヨーロッパ南部、地中海沿岸から小アジアで、20世紀に入ってから主としてオランダで選抜、交雑が行われ、カラフルな園芸品種が数多く作出された。

4月中旬からは、アズマイチゲ（キンボウゲ科）が目立つようになる（写真2）。白い花びらのように見えるのは萼片で、曇ると閉じる。乾燥した根茎は両頭尖^{りょうとうせん}または竹節香附^{ちくせつこうぶ}と呼ばれ、中国の華北、東北地区で民間薬として、リウマチ、神経痛、出来物、腫瘍の痛みに用いる。

下旬になると、キバナノアマナ（ユリ科）が愛らしい黄色い花を咲かせる（写真3）。明るい日差しに輝く姿は、春の妖精そのものである。黄花の甘菜の名のとおり、甘い味がする。アイヌ民族は葉を汁の実にしたり、鱗茎を焼いたりして食べた。

エゾエンゴサク（ケシ科）も雪解けと同時に芽を出し、4月下旬に開花する（写真4）。花色は多少変化があり、紫碧色または紅紫色、まれに白色で、後部は距となり、茎の先に多数付ける。花が終わると直ちに結実し、地上部は黄変後、跡形もなく消えてしまう。その地下には球形で径1.5～2 cmの塊茎がある（写真5）。中国産延胡索の塊茎を日干しにしたものは延胡索^{えんこさく}と呼ばれ、浄血、鎮痛、鎮痙薬として頭痛、胃痛、生理痛などに用いられる。

ケシ科植物には有毒な種が多いが、本種は例外的に食べることが出来、北海道を中心に利用されている。花には蜜があり、かすかに甘い味がする。若い茎、若葉、花、塊茎をゆでて苦みがなくなるまで水にさらしてから食用にする。地上部は淡白で癖がなく、浸し物、和え物、汁の実などに楽しめる。アイヌ民族は塊茎をトマと称し、さらしてから餅にした

り、焼いたり、煮て油を付けて食べた。また、ゆでてから糸を通して保存もした。

ニリンソウとオクトリカブト

5月中旬から下旬にかけて、旧教養部裏側の原始林の中はニリンソウ（キンボウゲ科）の白い花で覆われる（写真6）。ニリンソウとオクトリカブト（キンボウゲ科）が隣り合っ^て生えている場所が舗装道路から見えるが、それに気付く学生はほとんどいない。

ニリンソウはアイヌ民族にとってギョウジャニンニク、オオウバユリなどと並んでかつては重要な食料の一つであり、乾燥して保存された。この伝統が現在に引き継がれたためか、北海道と東北地方の一部にはニリンソウを山菜として食べる習慣がある。しかし、このニリンソウの葉は有毒なトリカブトとよく似ているため、道内外で誤食事故がよく起こる。

ニリンソウの葉は根生葉で、やわらかい長柄を有するが、トリカブトは直立または湾曲する茎を有し、やや厚い葉は互生する。このため、写真7のように草丈と形状が大きく異なる。ニリンソウは春先に白い花を1～3個付け（写真8）、トリカブトは秋に紫色の花を付ける。また、ニリンソウの根茎はやや太く、横臥するため、塊根を有するトリカブトとは区別できる（写真9）。

ニリンソウはプロトアネモニンを含有するため、触ると皮膚炎を起こすという文献もあるが、これまで筆者は皮膚炎を経験しておらず、ゆでてすぐに食しても全く問題はなかった。味は淡白でお浸しや汁物にすると美味しいが、誤食の可能性があるため、素人にはお勧めできない。その根茎は地鳥^{じう}と称され、リウマチによる疼痛、打撲症、解毒に用いられる。

エンレイソウ類

寮歌『都ぞ弥生』に延齡草とあるのはオオバナノエンレイソウ（シュロソウ科）で、5月に開花する。真っ白い花びらは、アイロンをかけたハンカチのようである（写真10）。昭和25年（1950）、農学部自治体が公募制定した全学バッジはこの花を図案化したもので、北大の校章として扱われている。

エンレイソウ類は北米の東部と西部、東アジアからヒマラヤに隔離分布し、道内では9種が確認されている。1本の茎の上に輪生する3枚の葉を持ち、その上に通常3枚の花弁がある1輪の花を付ける独特な形の多年草で、地下には太くて短い根茎がある。2年間の休眠を経て発芽した最初の年は細長い葉が1枚で、翌年に丸い葉になり、少なくとも5、6年かけて3枚葉になる。オオバナノエンレイソウの場合、種子から少なくとも15年近くかかって初めて花を咲かせる。寿命は少なくとも数十年と言われ、この長い期間が延齡草と書くゆえんであろう。種子にはエライオソームと呼ばれる甘酸っぱいゼリー状の物質が付いており、アリによって巣に運ばれる。

エンレイソウの乾燥した根茎は延齡草根えんれいそうこんと称され、催吐作用がある。民間では胃腸病、健胃に煎じて服用する。オオバナノエンレイソウと湿り気の多い地に生えたエンレイソウの若芽は食べられるが、十分に水にさらし、多食は避けたい。また、熟した果実には甘味があり、食べられる。なお、茎の下部や根には毒がある。

バイケイソウ

雪が解けて間もない殺風景な原始林に、写真11のような緑色の太い若芽はひときわ目立つ。バイケイソウ（シュロソウ科）である。

やがて大きく成長して2メートルほどになり、6月上旬から7月中旬に淡黄色の花を付けるが、地味であり目立たない（写真12）。

本州ではよく知られた毒草であり、ギボウシ類と誤認した食中毒事例が非常に多い。最近、道内でもギョウジャニンニクと誤認した食中毒事例が発生しているため、注意が必要である。東北地方ではかつては東雲草しのめそうの名で農業用殺虫剤や便所のウジ殺しとして使用されていた。また、ヒツジが妊娠14日目に食べると、一つ目の奇形を生むことも知られている。その根茎は藜蘆りふと称され、虫歯の痛み止め、出来物、血圧降下薬に使用されたが、毒性が強いため、現在では皮膚病などに使用されるのみである。

全草にペラトラムアルカロイドを含有する。正宗直教授（当部第2、21代監督、第5代部長）の初期の研究テーマはそれらの単離と構造決定、合成であり、筆者が化学科有機化学第一講座に分属して最初に与えられたテーマもそれに関連していた。当時、正宗部長、井野智（35工）監督を始め全部員が全国大会制覇を目指していたため、「全国大会が終わるまで、実験しなくても良い」と言われていた。そうとは知らない先輩たちは、実験室にいない稀に見る不真面目な4年目として呆れていた。全国大会（室蘭市）及び大学院入試終了後、全く進展のないそのテーマは消滅し、後に正宗教授を世界的に有名にしたダイズシストセンチュウ孵化促進物質関連の仕事が与えられ、筆者の研究生生活が始まった。

クロユリ

昭和50年代、恵迪寮の南側には氷河期の生き残りと言われるクロユリ（ユリ科）の群落が見られ、5月下旬には黒紫色の花を付けた（写真13）。しかし、恵迪寮舎解体（玄関な

どの一部は北海道開拓の村へ移設) 直後、その株のほとんどが何者かによって根こそぎ持ち去られた。僅かに残った株はツタウルシ(ウルシ科) に守られ、徐々にではあるがその数を増やしていた(今年4月末には確認できず)。その場所で、筆者は氏家真知子と後宮春樹のすれ違い、真知子巻、歌謡曲『黒百合の花』などの説明をした後、「お母さんが昭和28年頃の生まれで、真知子という名前の人はいませんか」と問うた。毎年、数名の学生が恥ずかしそうに手を挙げた。

昭和28年(1953)、「忘却とは忘れ去ることなり。忘れ得ずして忘却を誓う心の悲しさよ」のナレーションで始まり、全国の女性の魂を魅了しつつ、毎週木曜日夜8時30分～9時は女湯が空になったという伝説を残したNHK連続ラジオ放送劇『君の名は』。岸恵子の主演で映画化され、その中で織井茂子が歌った『黒百合の花』の歌詞は「クロユリは恋の花／愛する人に捧げれば／二人はいつかは結び付く」。

しかし、情熱のアイヌ娘ユミ(北原三枝、後の石原裕次郎夫人)の願いは叶わず、楽しいコタン祭りの夜、摩周湖に向かって身を躍らせた。また、アイヌ民族の文献に、恋の花と言う伝説は見当たらない。しかも花からは嫌な臭いが漂い、ギンバエが寄って来る。二番の歌詞は「クロユリは魔物だよ／花のかおりがしみついて／結んだ二人ははなれない」で始まる。このように、一般に信じられているイメージとはかなり異なっている。

アイヌ民族は鱗茎をゆでて油を付けて食べたり、澱粉を採って治療に用いた。また、花弁をつぶして黒い染料に用いた。

ミズバショウ

昔は「蛇の枕」と称され忌み嫌われていた

が、最近では「春の女神のハンカチ」などと称されている湿地の多年草(サトイモ科)。上記クロユリ群落の球場側に自生している。花のように見える白い苞が消えた後、芭蕉に似た葉は1m以上に達する(写真14)。B球場造成の際、有江幹男学長(当時)は本種の生育環境維持のため、給水工事を指示した。数年後に水は途絶えて乾燥化が進んだが、現在も20株ほどが生き残っている(写真15)。

冬眠明けのクマはこの若葉を食べる。それを見た開拓者たちが味噌汁に入れて食べたところ、口の中が腫れ塞がってひどい目であったという。クマは宿便を出す下剤として利用していたのであって、子グマには食べさせない。

アイヌ民族は葉を足の水疱を温包するのに用い、発汗剤としても用いた。腫物やおできに葉を貼って膿の吸出しに用いた。また、乳房炎に根をすり潰して患部に塗った。

ヒメザゼンソウ

春から夏にかけてのみ見られるサトイモ科の多年草(写真16)。小さな赤紫色の花は、葉が消えた後に地面すれすれに咲くため目立たない(写真17)。オオウバユリの若葉と見間違いやすいが、硫黄に似た独特の臭いがあり、葉柄がスポンジのように柔らかいため、無臭で葉柄がかたいオオウバユリとは区別できる。

上記のミズバショウと同様、細胞内にシュウ酸カルシウムの針状結晶を含むため、食べるとこれが粘膜に刺さり物理的に炎症を起こす。このため一般には食されていないが、米沢藩の名君上杉鷹山公が飢饉に備えて編集させた『かてももの』(享和2年:1802)に「ゑごな 能ゆびき煮て食ふ」と記され、この食文化が受け継がれている米沢地方では、現在

でも“えごな”と称して一部の食通が食している。生葉をゆでてから食べると美味しいが、やがて喉の奥と胃が刺すように痛くなり、その後吐くことがある。刺激の強さは産地により異なるが、原始林の自産品は刺激が強いようである。

アイヌ民族は若い葉を駆虫剤として食べたり、さつとゆでた後に乾燥して保存食とした。ぬるま湯でもどし、弱火で長時間煮汁が完全になくなるまで煮詰め、脂を加えて炒めることによって、刺激がなくなり甘くなる。

オオウバユリ

先のヒメザゼンソウによく似た葉（写真18）が5～7枚に達すると、高さ1～1.5mの花茎を上げて、7月に開花する（ユリ科、写真19）。1個の蒴果に翼のある種子を600個程実らせる。種子を散らした後の花茎はリースの材料として人気がある。発芽から開花まで最低6～8年かかり、一度開花・結実すると枯れる。開花期に葉が枯れるため、葉を同音の菌に掛けて姥百合と名付けられた。

花茎を上げない若い株の鱗茎は良質な澱粉を含み、アイヌ民族にとって最も重要な食料の一つであった。鱗茎をそのまま焼いて食べたり、円盤状に成型して保存したり、酒の原料にもした。澱粉は食用の他に、疾病の治療（特に下痢、小児の皮膚疾患）にも用いられた。

ドクニンジンとシャク

春先の殺風景な道路縁などで、写真20のような緑色の細かい葉は良く目立つ。ヨーロッパ原産の二年草で、古代ギリシャにおいて罪人の毒殺に用いられたドクニンジン（セリ科）である。有名な哲学者ソクラテスもこの毒草により獄中死したと伝えられている。古くは

このエキスを破傷風の治療や筋肉弛緩薬、鎮痙、解毒薬として用いたが、毒性が強いため、現在は動物実験用毒物としてわずかに用いられているにすぎない。

我が国へは江戸時代後期に長崎出島を通じて輸入され、失鳩答（シキウタ）の名で主に鎮痛薬や麻酔薬として利用された。明治4年（1871）の小石川御薬園栽培植物一覧にシキウタが見られることから、その頃までに種子が導入されたことが分かる。その後、各地の薬用植物園で栽培されたものが逸出し、野生化した。三重県では四日市港に荷揚げされた原毛に紛れ込んで侵入し、毛織工場がある市町に広がった。

札幌市に侵入した経路や時期は明らかではないが、北大構内のほぼ全域と新琴似町などに野生化しており、市郊外及び石狩市にその分布域を広げている。エルムトンネル工事の際に排出された土砂はサッポロさとらんの造成に用いられ、東区にも拡大した。

夏には草丈2m以上になり、周囲に異臭を放ち、6月下旬から7月中旬に白い小さな花をたくさん付ける（写真21）。一方、コジャクの名で山菜として利用されるシャク（セリ科）の群落がB球場の一塁側にある。最近、その付近にもドクニンジンが進出し、一塁ベンチ裏では両種が混在している。

両種の葉はよく似ているが、シャクの花（写真22）はドクニンジンより早く5月下旬に咲く。また、シャクの茎には白色の毛のある鞘があるが、ドクニンジンは無毛で鞘はない。更に、ドクニンジンにはネズミの尿のような悪臭があり、茎には赤紫色の斑点がある（写真23）が、シャクには悪臭も斑点もないため簡単に区別できる。学生たちにはその赤紫色斑点を「ソクラテスの血」と説明した（実際には呼吸麻痺で死亡したので吐血や出血な

し) ところ、すぐに覚えてもらえた。道衛研時代の夏の暑い日、昼休みに地共済球場で練習していた筆者は三塁側ベンチ裏のドクニンジンから発せられる異臭で吐き気を催し、早々に引き上げた経験がある。

平成9年(1997)4月には札幌市内において、ドクニンジン誤食による食中毒が2件連続して発生している。共にシャクとの誤認であった。本OB会員におかれましては、ソクラテスの血及びネズミ尿の悪臭を常に思い起こし、決して口にしないようお願いしておきたい。

ゴボウ

B球場を取り巻く道路の傍らには、写真24のような大きな葉を持つ植物がたくさん生えている。野生化したゴボウ(キク科)と学生たちに説明しても誰も信じない。細くて長い根を掘り上げて匂いをかがせると、「あっ、ゴボーだ〜〜♡」と納得してもらえた。頭花は球形で、8月頃に咲く(写真25)。

野生種は中国北部からヨーロッパにかけて広く分布する。中国では古くから根を牛蒡根、果実を牛蒡子と称して薬に利用していた。我が国へは中国から薬用として渡来し、当時はキタイス、ウマフフキなどと称されていた。平安時代後期から野菜としての栽培が始まったが、外国ではほとんど食用として利用されておらず、日本独特の野菜と言える。このため、戦争中にゴボウをアメリカ人捕虜に出した陸軍中尉は、昭和21年(1946)、木の根を食べさせたという理由により無期懲役の判決を受けるという悲劇が起こった。

北海道には縄文時代に樺太を経由して渡来した可能性もある。明治以前には広く蝦夷地でも栽培されていたが、山野にも野生化していたという。

アイヌ民族は葉を穀物と一緒に突き碎いて団子として利用した。根を汁の実とし、薬として傷口や膿出しに使用した。また、刺のある果実を高床の下にばらまき、ネズミやクマなどから穀物を守った。

トリカブト類

8月下旬、原始林の舗装道路沿い、手を伸ばせば届くところにオクトリカブトが紫色の花を付ける(写真26)。それに目を向ける通行人はほとんどいないが、説明すると「え〜、これがあの有名なトリカブトなの〜」と皆が驚く。本種はもともとここに自生していたものではなく、誰かが植えたとされている。

トリカブトは全草に猛毒のアコニチン型アルカロイドを含有し、有毒植物相撲番付では東の横綱に位置付けられている。しかし、日本に約30種類あるといわれるすべてのトリカブトに毒があるわけではなく、種類や産地により毒力は大きく異なる。毒性が特に強い種は日高地方に多いエゾトリカブトと札幌近郊から渡島半島、東北地方に多いオクトリカブトとされている。オクトリカブトの中では小樽市銭函と蘭島辺りのものが最強と言われ、日高のアイヌ民族はそれを求めてはるばると旅をし、矢毒に用いた。

貝原益軒の『大和本草』(宝永6年:1709)に「篤信曰今モ蝦夷人ハ附子ヲ矢シリニヌリテ獸ヲ射ルト云其名ヲブスト云是艸烏頭ニテ煎タル射罔ヲ云ナルヘシ」と記されているように、アイヌ民族は毒矢を主として狩猟に用いたが、戦にも用いた。寛文9年(1669)の夏、鉄砲で武装する松前軍に対し、シャクシャインらが毒矢と半弓で挑んだ記録が松前藩史に残っている。明治9年(1876)、開拓使御雇教師頭取兼顧問ケプロンの黒田清隆長官に対する提言により、毒矢による禽獣の捕獲は

禁止された。これによりアイヌ社会に継承された毒矢の文化は衰退した。

戦前、正宗先生の恩師である杉野目晴貞教授（有機化学講座初代教授、後に学長）の研究テーマはこの猛毒アルカロイドであった。毎朝「Etwas neues?」と実験室の学生に声をかけ、新しい結晶が取れるのを楽しみにしておられたという。道内、東北各地はもとより遠くは樺太まで出向いて研究用試料を採取したのは、筆者も抽出操作の手ほどきを受けた上野正司技官。終戦直後に進駐軍が北大にやってきた際、戦争協力者と見做されることを恐れた上野技官は農場から馬を借り、南19条の杉野目邸まで石山通を駆けた、先生は落ち着き払って「上野、心配するな。彼らはジェントルマンだ」と言われた、と聞いている。昭和50年頃、茶箱に入れられ倉庫に眠っていた大量のトリカブト塊根の焼却処分を手伝った思い出がある。

北海道立衛生研究所薬用植物園

獣医学部学生に対する野外講義の際、筆者は佐々木倫子著『動物のお医者さん』の単行本を1冊示し、「この漫画を読んで、北大獣医学部にあこがれて入学した人はいますか?」と真っ先に問うた。多くの学生が手を挙げた際には「舞台となったここの西隣、道路を一本挟んだところに菱沼聖子さんと言う“ヘンな社会人”が勤める会社が登場します。その会社が私の勤める北海道立衛生研究所で、菱沼さんのモデルも実在するんですよ～」と続けた。これらのやり取りの間お互いが打ち解け、質問も出るようになった。

昭和59年（1984）4月から平成26年（2014）3月までの30年間、筆者は同所薬用植物園を担当し、毒草の誤食中毒が起こった際に原因植物を鑑定する業務等に従事した。このため、

一般的な薬用植物を植えた標本園の隣に、山菜・毒草コーナーを設置した。ニリンソウとトリカブト、ギョウジャニンニクとイヌサフラン、タチギボウシとバイケイソウ、シャクとドクニンジンなど山菜と間違えやすい毒草を隣り合わせに植えて、手に取り、匂いをかいで直接その違いを比較できるように工夫した。誤食中毒が起こった際には新聞記者・テレビ局取材の舞台ともなった。筆者はそこで山菜講習会を開催し、退職間際には北海道食品衛生課、札幌市保健所との共催「春の山菜展」に発展させた。筆者が退職した後も続けられており、毎年マスコミにも取り上げられている。

限られた曜日と時間帯であるが、4月下旬から9月までは一般公開もされ、資料も豊富に準備されている。より深く勉強したい方に見学をお勧めする。

おわりに

平成24年（2012）5月26日、化学科42期と化学第二学科6期の卒業40周年記念合同同期会を開催した。北キャンパスに集合し、各種研究所、エルムトンネル、三代目恵迪寮、北大球場、平成ポプラ並木、サクシュコトニ川、遺跡保存庭園、B球場、原始林、イチョウ並木、大野池、中央食堂などを経てクロフネツツジが満開の旧理学部本館（総合博物館）まで、筆者はハンドマイク片手に案内し、それらの歴史や自生する植物を中心に説明した。歩数は1万歩を超え、「疲れた～」と悲鳴を上げた女性もいたが、北大キャンパスの歴史の一端を学び、一面に広がる満開のオオバナノエンレイソウに「名前は聞いていたが、実物を初めて見た」と感激した同期生が多く、満足してもらえた。学生時代は勉学に忙しく、花などに目を向ける余裕はなかったのであろう。

北国の自然を雄大に歌い上げている『都ぞ弥生』が作詞された当時、恵迪寮（初代）は総合博物館の真向い、文系校舎の辺りにあり、その裏を流れるサクシュコトニ川の兩岸にはエルムの森が広がっていた。今残っている原始林は乾燥化が進み、横山芳介氏が見た当時とは様相が大きく異なっているであろうが、『都ぞ弥生』を口ずさみながらB球場界限を散策しては如何であろう。そして自然豊かな北大に学び、更には準硬式野球部の多くの仲間に出会えた幸せを改めて感じて頂きたい。この拙文がその契機になれば幸いである。

なお、今回はB球場に隣接する原始林に自生する植物を中心に紹介した。遺跡、建造物などの歴史については稿を改めたい。

附 記

筆者は、OB会報No.14-1、3及び4（平成14年：2002）に「北大B球場界限そぞろ歩き」と題して北大構内の歴史や植物を簡単に紹介した。後年、それを基にしてより詳しい「北大北キャンパスで見られる薬草・毒草・山菜」を『道薬誌』第27巻3、5、7号（平成22年：2010、北海道薬剤師会発行）に、「北大構内の昔と今」を『るつぽ』第63～65号（平成27～29年：2015～2017、理学部化学同窓会発行、共著）に寄稿した。本稿は薬剤師向けの前稿を本OB会員向けに大幅に書き改め、再編集したものである。

寄稿の機会を与えて頂いた実行委員会副委員長米山和彦（記念誌担当）、幹事齊藤いづみ両氏及び北海道薬剤師会に深謝します。



B 球場の南に広がる原始林

〈2023. 4. 28〉



写真1 クロッカス花
〈1984. 4. 28〉



写真2 アズマイチゲ花
〈2000. 5. 4〉



写真3 キバナノアマナ花
〈1995. 4. 27〉



写真4 エゾエンゴサク花
〈1984. 4. 28〉



写真5 エゾエンゴサク塊茎
〈1995. 5. 17〉



写真6 ニリンソウ群落
〈1994. 5. 22〉



写真7
ニリンソウ(手前)
とオクトリカブト
〈2009. 5. 3〉



写真8 ニリンソウ花 〈1986. 5. 16〉



写真9 オクトリカブト(左)と
ニリンソウ(右)の全草
〈筆者宅栽培品／2023. 5. 6〉



写真10 オオバナノエンレイソウ花
〈1984. 5. 16〉



写真11 バイケイソウ若芽 〈2023. 4. 28〉



写真12
バイケイソウ花
〈1994. 6. 10〉



写真13
クロユリ群落
〈1983. 5. 27〉



写真14
ミズバショウの
展開した葉
〈1992. 6. 10〉



写真15 ミズバショウの生き残り 〈2023. 4. 28〉



写真16 ヒメザゼンソウ若葉 〈2023. 4. 28〉



写真17 ヒメザゼンソウ花 〈1986. 7. 29〉



写真18 オオウバユリ若葉 〈1995. 4. 27〉



写真19 オオウバユリ花 (1992. 7. 21)



写真23
ドクニンジン茎
の斑点
(2010. 7. 6)



写真24 ゴボウ若葉 (2023. 4. 28)



写真20 ドクニンジン若芽 (2010. 4. 7)

写真25
ゴボウ花
(1983. 8. 10)



写真21 ドクニンジン花
(1984. 7. 11)



写真22 シャク花
(1992. 6. 2)



写真26 オクトリカブト花
(2005. 8. 25)